帽子屋と迷路

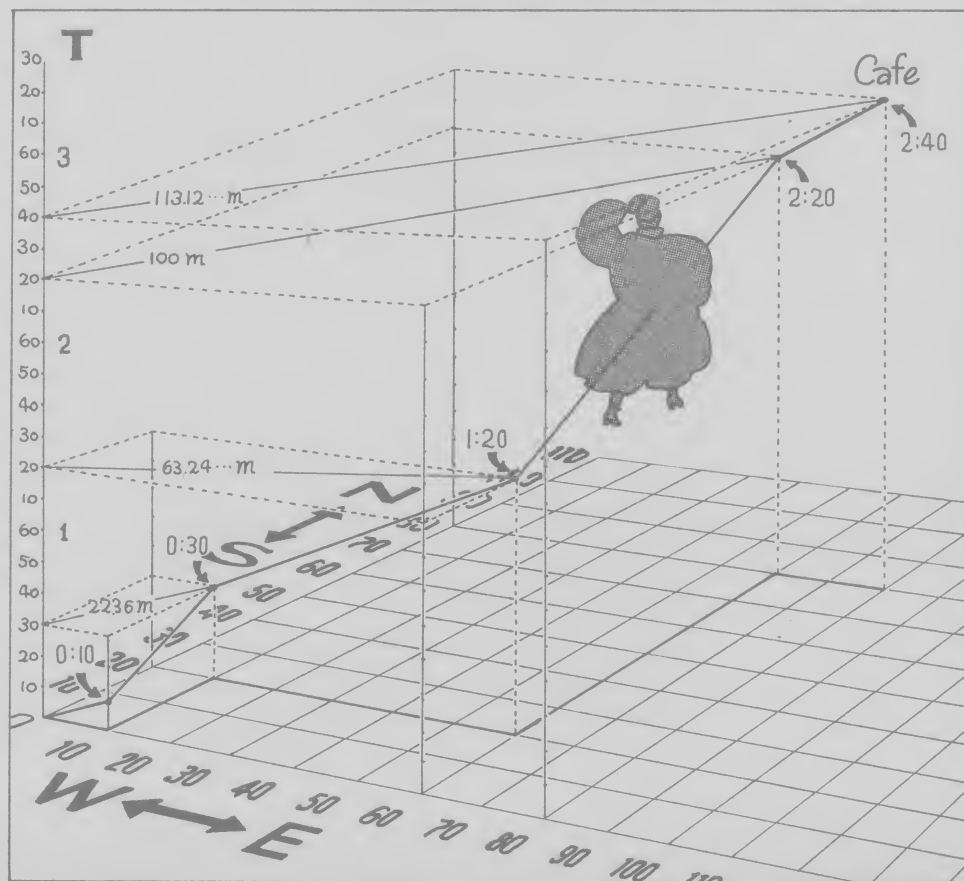
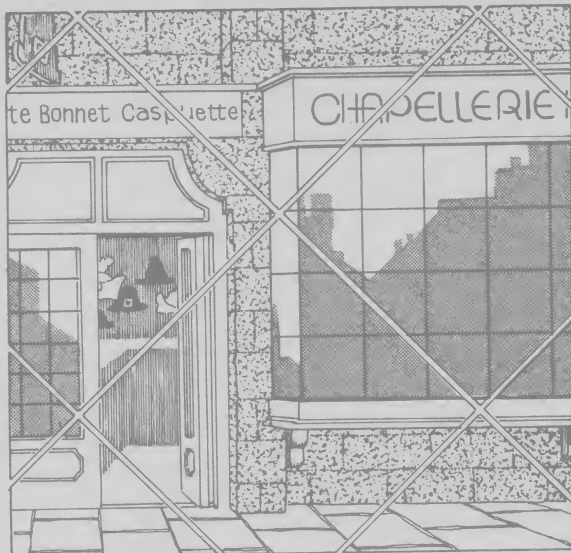
ひさうちみちお

ローズ
セラヴィ

組合せは
無限と言うに

偶然のエネルギーの
出会いがかくも
愛らしい第三の
複素数を
生んだのか
a+bi

と言うような怪しげな事をブチブチロごもりながら
今頃になると先生はいつも家から北と東へ１分20秒ずつ
歩いた所のコーヒー店へ行きます

毎日、コーヒー店への道をほとんど加速も減速もせず一定の速度で、
「方位と距離を表す平面のグラフに対して一定の角度を持った
三次元グラフの世界線を実践している」のだそうです

しかしそれは飽くまでついでの事でして
先生が毎日、同じ時刻に同じカフェの同じ
窓際の席に座って同じ方を見て過すのは
他に理由があるのです

通りの向いの帽子屋の売り子の娘が
その理由なのであります

それなればこそ先生は先生と同じように
お偉い向きや金持ちの旦那方の開くサロン
など見向きもせずにせっせと場末のカフェに
通われるのです

かく言う自分の如き無学文盲、無知蒙昧
のやくざ者をお見知りおきいただいてるのも
きっかけと申しますのは

これ子供

KISS
へえ？
ワシか？

御用
だすか？

さあ、これで
女達にもっと
ふるまって
やるといい
あ、いやあ
こらえらい
すんませえん

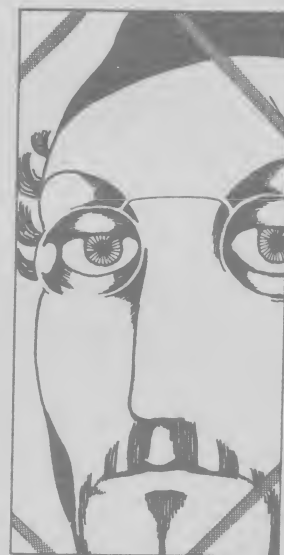
何ぞ
おこまり
で？
お役に
たちまっせ

向いの
帽子屋の
娘の名前
を知りた
い
内密に

おやすい
御用や

ブツブツと小娘の名前をくり返しながら
先生はひどく慢足げに日の暮れまで
帽子屋を眺めるのです

他に何をするでもなくただ座って一日中
飽きずに眺めるのです

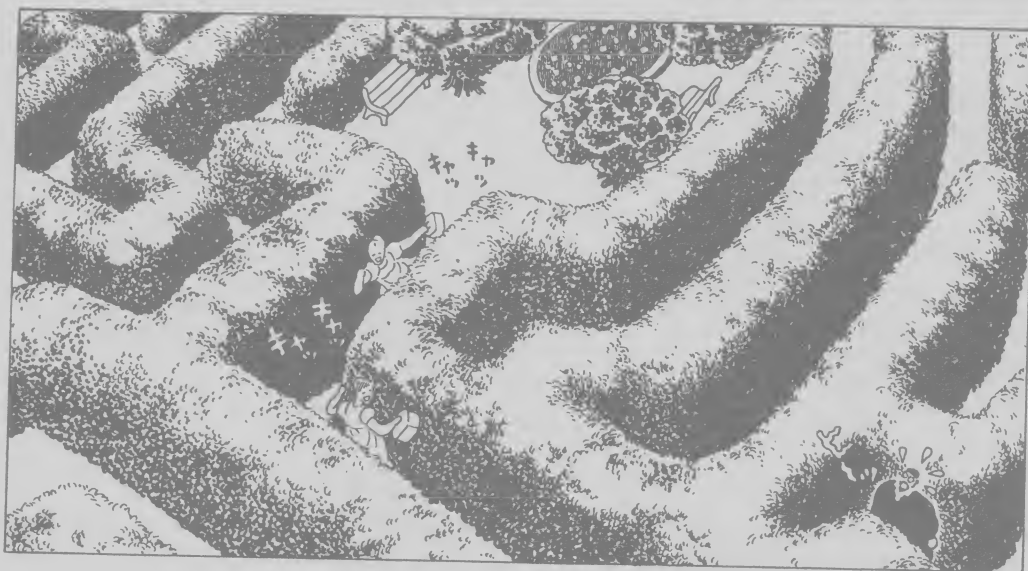
ある日先生は手紙を持ってきました

自分はなるほどと思いました
さすがにお偉い人はガツガツあせらずに
名前を聞いて手紙を出して芝居に誘っ
て晩メシに呼んで、と順序正しく作法通
りにこますのかと思ったのですが

いっこうにその気配も見せずそれどころか
相変らず帽子屋を眺めるだけで満足しきっ
てるのです

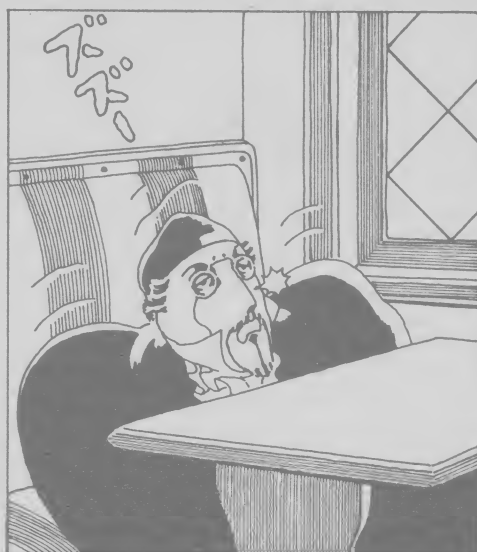
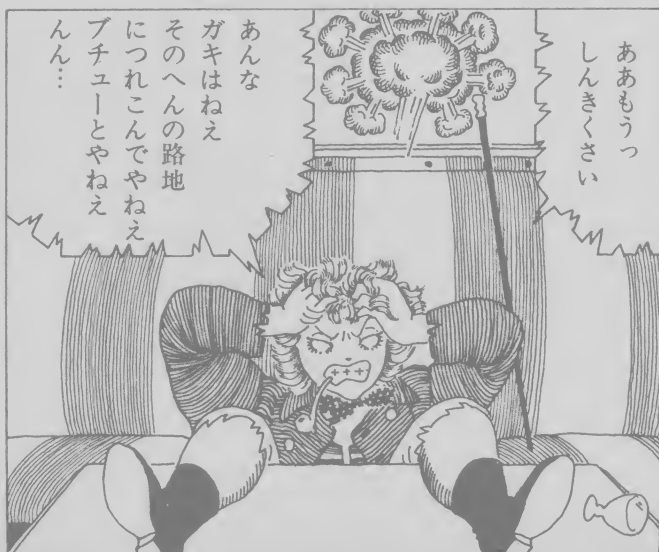
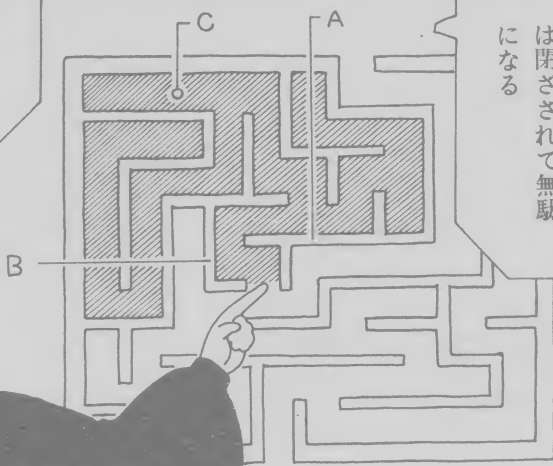
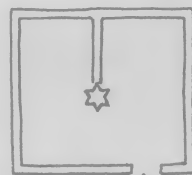
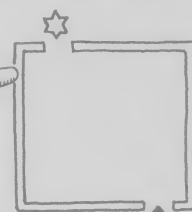
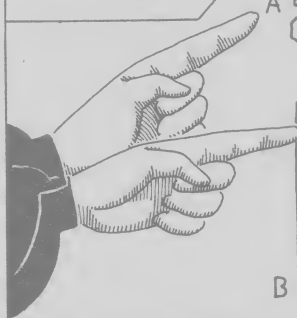
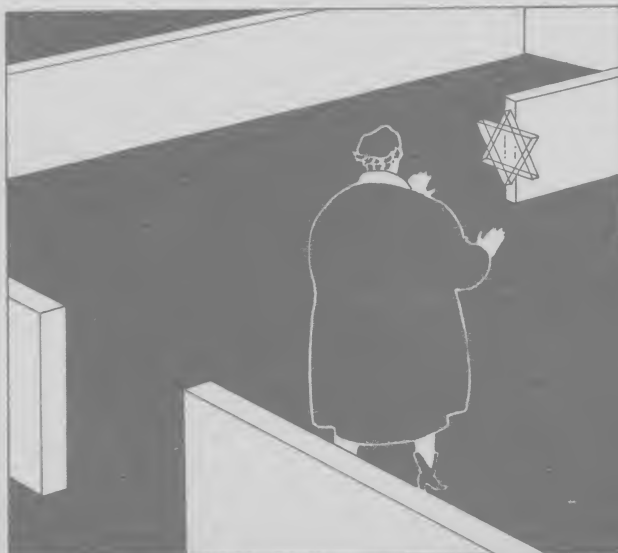
しかしただ眺めるだけと言ってもそれは
それなりにモンダイがありまして………

娘は12時になると仲良しのお針子と一緒に
近くの公園へお昼を食べに行きますが

たかだか一時間や二時間、座って待てば
良いものを御苦労にも先生は娘達
を追って公園に行くのであります

公園には昨今流行りの迷路庭園なるものがありまして娘達はいつも決ってその中で弁当を広げるのです

つまりそれが先生のナヤミのタネでありまして

娘達を追ってそこへ入ったが最期たっぷり三時間は歩きまわった挙句隊に娘達を発見できないままヨレヨレで絶望的に挫折なさいます

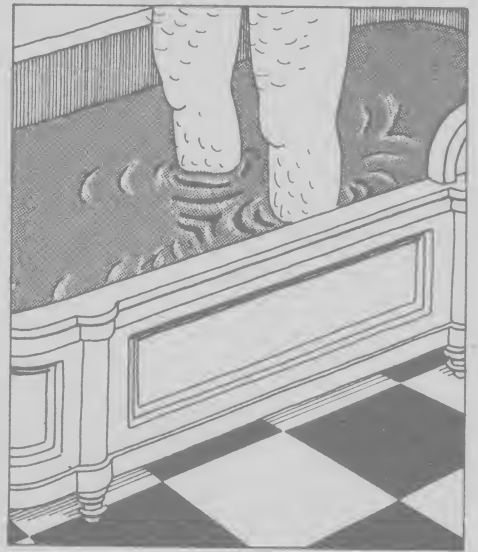
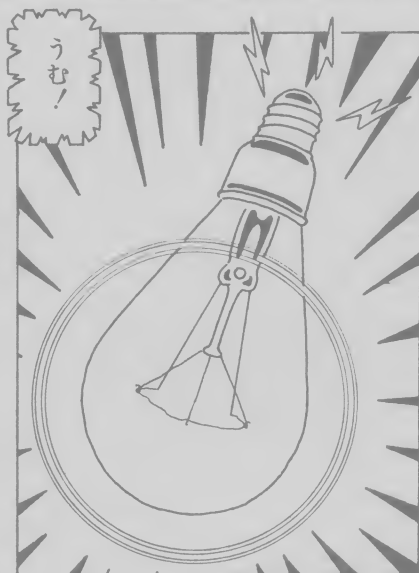
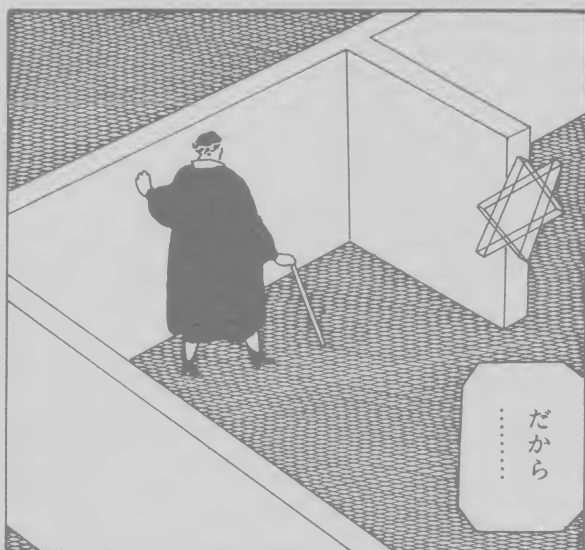
しかし毎日挫折するのは大変疲れるものですから先生はなんとか迷路に迷わない方法を考えようと決心しました

と言うような安直でずるいやり方は見向きもせずに真面目に根本的な解答を追求なさったのです

先生の仰言るには庭の全ての空間を
有効に迷路を使うには外側の壁から
伸る壁が互いに接する事なく入りく
まなければならないそうで……

と、そこまでは良かったのですが、では
どうすれば盲人が囲いの中の一点に確実
にたどり着き、出て来る事が出来る
のか、それが問題でした

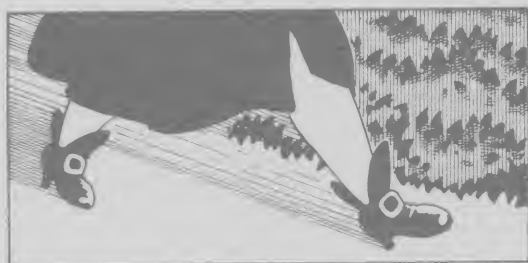
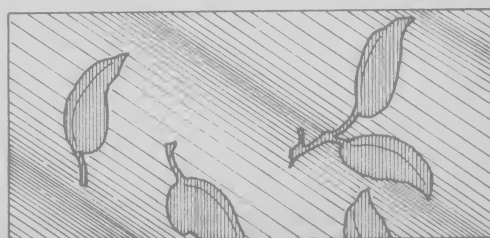
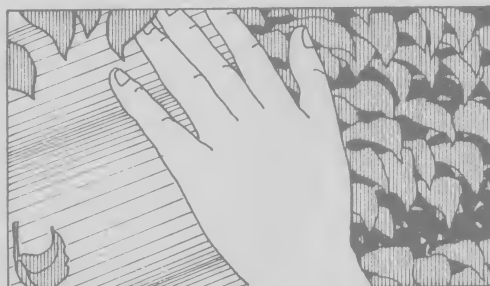
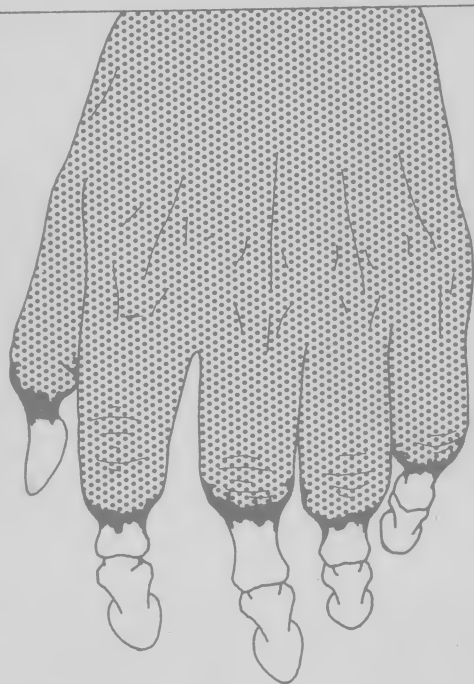
ザプッ

ザバァ

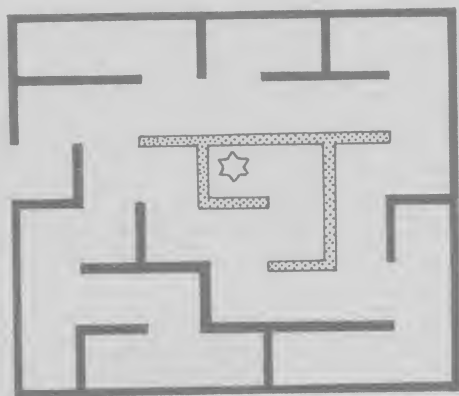
と言うような事とは無関係だし………
あ…
コトン

とっとっ……

見えなければ触って知る……当然の事だ

要するに迷路に入ったら壁に手をあて決して離す事なく前進すれば全ての小路をムラなく歩き故に確実にゴールへ到り確実に迷路から出られる、と言うのです

翌日先生は早速に理論の実践を
試みましたが

結果的には

失則でした。

あいたああ…

先生はやっぱり三時間近くも歩きまわり、その挙句樹の壁に手をけずられて、それはすっかりちびていました。

失則の原因とゆうのは迷路の中に外側の壁から伸びているのでない独立している第二の壁があってその中にゴール（娘が弁当を広げる所）があった事なのだそうですが

先生がそう推理した頃先生の手はバイ菌が入って腐りかけていたのであります。

センセはよ医者に行きなはれやあ

とすすめてみてもなにやら頭の方までバイ菌がまわってるようなフンイキで

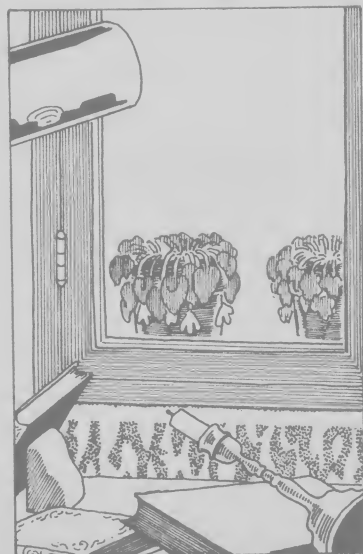
そのうち腐った手がだんだん匂ってきたもんでカフェからも追い出されてしまいました。

イッセンモ
イランワ

すると今度はカフェの横の路地に座りこんで帽子屋を眺めるのです

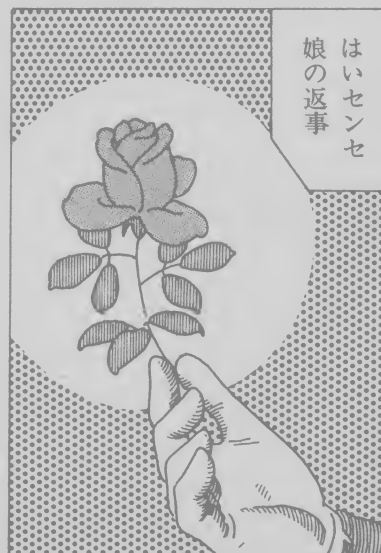
さすがに自分もつきあいきれずそれに匂いにも閉口してたもんで

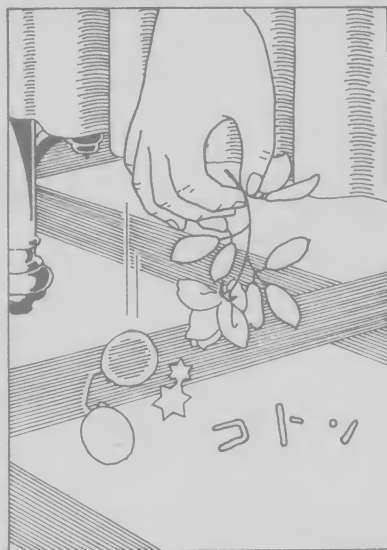
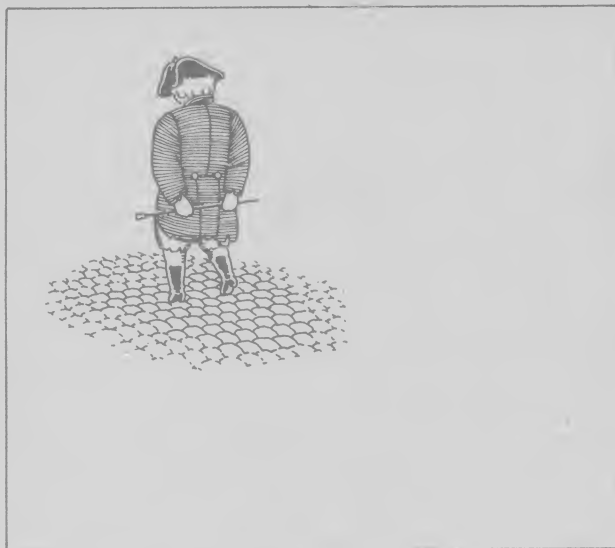
しばらくはいつもの如く酒池肉林に興じておりましたが三、四日もして気が付くと先生の姿は路地からも消えていました。

ちょっと心配なので家に行ってみますと

先生は例のヤバイ匂いの充満する部屋の中でムシノイキでまた手紙を書いたから届けてくれろと言います

おやすい御用や

手紙を持って行って帰り際に自分は帽子に飾ってあった造花をくすねました

ブチッ

チャチな造花を先生はとても喜んで

と辞世の句を言って死にました

先生の部屋を出て帽子屋の前を通り
かかると娘は昼寝していました